

クリスチャンの信仰7つのポイント

マラナサ・グレース・フェロシッポ 菊地 一徳氏

では、今朝のメッセージのタイトルは「クリスチャン信仰の7つのポイント」というものでお伝えしていきたいと思います。クリスチャン信仰、キリスト教信仰と言ってもいいと思いますね。その信仰の7ポイント、キリスト教のABCいろはシリーズということで、その7ポイントも皆さんよく知っているポイントだと思います。それを一つ一つ取り上げながら、皆さんにも確認をして頂いて、それをまた人に伝える時には、意識して、押さえながら、全部7ポイントきっちりやらなくてもいいとは思いますが、だいたいのポイントを皆さんの思いの中で、心の中で、確認をし、そして押さえながら、自分の言葉で結構ですから、それもまた伝えて頂きたいと思います。万が一においても、「その7ポイント、全然分かっていなかった、それを全く押さえていなかった」という方がこの中にいらっしゃれば、是非、今日、それを自分のものとして頂きたいと思います。

そのクリスチャン信仰7ポイントは、まさにクリスチャンとしての歩みを指すものでありますから、出発点、原点というふうにも考えて下さい。「ここからスタートしていくんだ」ということ。スタートを間違えれば、勿論ゴールも間違えてしまうかもしれません。ですから正しいスタートを切っていくことが大事です。そのクリスチャンへの道、出発点の信仰というものを今から7つ取り上げたいと思います。信仰と言っても、いろいろな信仰があるわけですが、私たちは聖書の言葉に基づいた信仰を持っております。天地万物を創られた創造者、唯一真の神を私たちは、信じております。そして、その神の前に私たちは自分が罪人であるということも認めて、その罪を悔い改めた者であります。そして、イエス・キリストの十字架の贖いと、その復活によって、その救いを受けた者である、ということも信じております。それをまさに自分のためにイエスが十字架にかかって死んでよみがえって下さった、自分を救うために、自分を罪と死から救うために、イエス・キリストがすべてのことを2000年前にエルサレムのゴルゴダの丘の上で、十字架にかかって成し遂げてくださったことを、信じる者は、誰でも救われるのであります。これを聖書では福音と言います。ゴスペルとも言います。その意味は良い知らせ、良き訪れ、グッドニュースと英語で言います。その内容を7ポイント簡単に皆さんと共に、確認をしながら、押さえて頂きたいと思います。

先ず第1ポイントは、「まことの神を信じる」ということから始まります。本物の神を信じるということ。**創世記の1:1**は、聖書の冒頭句であります。いきなり聖書はこの言葉から始まるのです。

初めに、神が天と地を創造した。(創1:1)

神が存在することが大前提となっています。実は、新島襄という人は、この**創世記の1:1**の言葉に出会って、衝撃を受けて、そこから彼はクリスチャン生活を始めたと言われております。今晚もNHKの大河ドラマで『八重の桜』をやっていますが、その八重さんの夫が勿論、新島襄であります。同志社大学の創始者でもあります。そして、その彼がこのようなことを言っています。

『私は聖書を置いて辺りに目をやってみた。そして、このように自問した。私を造ったのはだれか。私の両親か。そうではない。それは、私の神だ。神が私の両親を造り、そして両親を通して私を造られたのだ。私の机を作ったのはだれか。大工か。そうではない。それも私の神だ。神は地上に木を生えさせられたのだ。大工がこの机を作ったのではあるが、それは実際には木から出来たのだ。そうであるなら私は神に感謝し、神を信じ、神に対して心正しい人にならなくてはならない。』

新島襄の言葉です。こうして彼は、真の神に出会って、そして真の神を信じる決心をして、真の神と共に生きるという選択をしたのであります。それが第1ポイントです。

第2ポイントは、「神の前に罪を認め、悔い改める」というものです。なぜ、人間は神の前に罪を悔い改めなければならないのでしょうか。それは人間が生まれつき神に背いてしまう、その罪の性質、これをキリスト教用語では『原罪』といいます。”Original Sin”と英語で言います。『原点の原』に『罪』と書いて『原罪』と言います。人間が生まれつき神に背いてしまう罪の性質、『原罪』を産まれもって、私たちは持ち合わせているのであります。これは証明する必要もないと思います。と言いますのは、小さな子供でも罪を犯すからであります。親が罪を教えたわけでもないのに、小さいころから平気で嘘をつきます。どうやって嘘をつくのか、親は教えません。そして、小さな子供は、人の物でも自分の物だと主張して、そして自分の物にならなければ、^{かんしゃく}癇癪を起して、場合によっては暴力やいろいろな手段を講じて、だますなりして、自分の物にしようとしめます。誰も教えていないのに、それがまさに罪の性質であります。ですから、小さい時から教えられなくても私たちは、このことを経験的に知っています。数々の罪を私たちは犯してきたはずです。そして、身も心もこの罪に完全に支配されてきた、ということも誰もが知っているものであります。三浦綾子さんというクリスチャンの作家が『氷点』という小説を書きました。その『氷点』というのは、日本では勿論知らない人はいないと思います。ドラマ化もされて、何度もリバイバルされて、今でも多くの人に読まれているものです。その三浦綾子さんの『氷点』のテーマが『原罪』でありました。その中にこういうことが書いてありますから、少しこれも紹介させて頂きたいと思います。自分の妻 夏江に復讐しようとする夫 啓造の心の内が次のように語られています。

「心の底などと言って、底のあるうちはまだいいのだ。底知れないこの穴の中から自分でも想像もしなかったもっと恐ろしい^{ささや}囁きが聞こえてくるのではなかろうか。」

三浦綾子さんは、ここで地獄を表す言葉を使って、永遠の滅亡への不安を示しています。これが『原罪』の要素であるということです。心の底などと言って、底のあるうちはまだいい方だ、と。底知れないこの穴の中から自分でも想像もしなかったもっと恐ろしい囁きが聞こえてくるのではなかろうか、というこの言葉を皆さんも聞くと、自分の中にも確かにそのような心の中の闇というか、穴が存在するということが、きっと認めざるを得ないと思います。

では、どうしたらこのような『原罪意識』から解放されるのか、ということも、この『氷点』の中で、三浦綾子さんは、主人公の陽子に、このように語らせております。

「私の血の中を流れる罪をはっきりと『赦す』と言ってくれる権威あるものが欲しいのです。」

これは、絶対者である神の『無罪宣言』、これがあって初めて人間は原罪の重荷から解き放たれると、いうことを暗示している宣言であります。この宣言を成し得るのは真の神だけであります。そして、聖書の中に、その原罪を元にいろいろな罪が私たちの内から溢れ出ているということが明記されていますから、そのところも皆さんと共に読み、一つ一つ確認して、自分が間違いなく100%罪人であるということをもう一度覚えて頂きたいと思います。ローマ 1 : 29~32 を開いて頂きたいと思います。

29 : 彼らは、あらゆる不義と悪とむさぼりと悪意とに満ちた者、ねたみと殺意と争いと欺きと悪たくみと
でいっぱいになった者、陰口を言う者、

30 : そしる者、神を憎む者、人を人と思わぬ者、高ぶる者、大言壮語する者、悪事をたくらむ者、親に逆

らう者、

31：わきまのない者、約束を破る者、情け知らずの者、慈愛のない者です。

32：彼らは、そのようなことを行えば、死罪に当たるという神の定めを知っていながら、それを行っているだけでなく、それを行う者に心から同意しているのです。

この罪のリストを目で追って見て下さい。自分の中に該当するものは無いでしょうか。今朝起きてから、これらのリストにある罪を皆さんは、犯さなかったでしょうか。我が子が逆らう、親に逆らうことも、これは死罪だと書いてあります。そのように皆さんは、考えたことがあるでしょうか。子供だから親の言うことを聞かないで逆らうのは当たり前だと、そう思っているでしょうか。聖書によれば、親に逆らう者は死罪にあると。自分の子供が死罪にあたる罪を犯しながら、可愛い子供だと、「しょうがない。まだ小さいから。」死罪にあたる罪を我が子が犯しているのに、あなたはどのように大目に見るということをしてしまうのでしょうか。自分もどうなのか、ということを考えながら、そして、あなたの家族はどうなのか、あなたの親しい者たちはどうなのか、もしこれらの罪を行っているならば、聖書においてハッキリそれは、死罪にあると。恐ろしい罪ですね。そして、聖書には他にも罪のリストだけでなく、肉の働き、肉の行いに関するリストも、リストアップしております。これは**ガラテヤ 5：19～21** に書いてあります。

19：肉の行いは明白であって、次のようなものです。不品行（日本語では死語になっていますが、“porneia”というギリシャ語、ポルノグラフィの語源です。性を売り物とするありとあらゆる性的不道德の罪です。）、汚れ、好色、（これも性的罪の類です。）

20：偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、

21：ねたみ、酩酊、遊興、そういった類のもです。前にもあらかじめ言ったように、私は今もあなたがたにあらかじめ言っておきます。こんなことをしている者たちが神の国を相続することはありません。

とくに後半末尾のこんなことをしている者たちが神の国を相続することはありません。というところに注目して下さい。言い換えれば、天国には行かない、地獄に行くんだということです。これらのリストに該当するものは無いでしょうか。ちなみに『魔術』という言葉は、ギリシャ語では“pharmakeia”と言います。英語の“pharmacy”の語源です。“pharmacy”は、薬とか薬局といった意味であります。薬を使う、薬物を使う罪です。麻薬などはこれに該当しますし、もちろんアルコールやニコチン、そういった薬物もまたは、病院で処方されるような薬物、これらを使って罪を犯すということ。また、これらに完全に依存してしまうこと、それが無くては生きていけない、勿論病気の人は薬を必要とすると思います。一生薬を飲み続けなければいけないような病気を持っている方もいらっしゃると思います。しかし、飲まなくてもいいのに、本当は必要がないのに、それを習慣的に摂取し続けて、自ら依存症になっていく、中毒症になっていく、それは偏^{ひとえ}に自分の肉を喜ばせるため、自分を楽しませるため、いらいらを解消したり、ストレスを解消したり、全部自分の為です。元気になって、より一層神に元気にお仕えする為ではないわけです。そういったものは、すべて魔術の罪に該当します。

これらを行っている者、一回二回といった意味でなくて習慣的に行っている者、それらは皆、天国を相続出来ない。クリスチャンかクリスチャンでないかは、ここに書いてありません。ですから、自分はクリスチャンだから関係ないと思わないで下さい。自称クリスチャンだろうと何だろうと、これらの罪を習慣的に行っているならば、あなたは神の国を相続出来ない、天国には行けないと言っているのです。厳粛に受け止めなければいけません。

こういったリストを見るだけでも、十分ですね。罪のリスト、肉の行ないのリスト、その中に自分が日

常的に行っている罪の数々、それが見られることによって、まさに私は、罪人であって、神の裁きを受けなければならない者だという認識に至ると思います。そして、勿論その罪がもたらすものは、死である。**ローマ 6:23** にも**罪から来る報酬は死です。**と書いてあります。この『死』というのは勿論 肉体の死だけでなく、霊的な死も表すわけです。『霊的な死』というのは、神との交わりを完全に失うというものです。神の愛をもはや知ることが、味わうことも出来ない、その状態のことを『死』『魂の死』と言ってもいいかもしれません。そのような罪を私たちは聖書から教えられています。他にも、『**モーセの十戒**』これも目安になると思います。**出エジプト記 20章**に、モーセの十戒が記録されています。これも日常的に意識していただくと、本当に神に従う者か、それとも神に逆らう者か、つまり罪人かどうか、判別することが容易に出来ると思います。**他の神々があってはならない (1戒)**。あなたの為に、自分の為に**偶像を作ってはならない (2戒)**。そういったところから始めていただいて、**主の御名をみだりに唱えてはならない (3戒)**とか。また、**安息日を覚えてこれを聖なる日とせよ (4戒)**。そして、**あなたの父と母を敬いなさい (5戒)**。先ほどのリストの中にも、出ています。**殺してはならない (6戒)**。**姦淫してはならない (7戒)**。**盗んではならない (8戒)**。**あなたの隣人に偽証してはならない (9戒)**、嘘をついてはいけません。今日あなたは嘘をついたでしょうか、昨日嘘をついたでしょうか。そしたらあなたは立派な罪人であります。また、**隣人のものを欲しがってはならない (10戒)**。隣の家だろうと、隣の奥さんだろうと、隣人のものを欲しがってはならない。その10の言葉、十戒、これをクリヤー出来ていないならば、あなたはアウトです。つまり罪人であるということです。そして、先ずは認めることから始めなくてはなりません。そうでなければ、悔い改めようがないわけです。

次に『悔い改める』とは、どういうことか。それは、神の前に自分の心を神に向けて、罪の赦しを乞う、神に立ち返る、回心するということでもあります。「単に後悔すること」を悔い改めとは言いません。「何てことをやってしまったんだ。取り返しのつかないことをやってしまった。」それは自分に対して残念だという思いを抱いているだけです。赦しを得るために何か努力をしたり、「神に認められるために修行しなさい。」というのが、悔い改めでもありません。人間は誰でも罪の性質を持っているということは、さっき原罪の話をするときにお伝えしました。ゲートルもこう言っています。

「人は努力する限り、罪を犯す。」(ゲートル) と

罪しか犯さないわけです。悔い改めというのは、ですから人間の行ないによっては、とても実現出来ないものです、実行出来ないものです。努力する限り、罪を犯してしまうからです。

ですから聖書的な悔い改めとは、罪から神への心の方向転換をするということです。神の力と神の愛を、心に受け入れるということです。

(イエス・キリストは、) **求めなさい。そうすれば与えられます。**(と約束しています。) **捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。**(マタイ 7:7)

神に求めるべきものです。自分の力で何とか悔い改めようとするのではなく、自分の力で過去を清算しようとするのではなく、これはとても自分には出来ないこととして認めた上で、どうしようもない救い難い罪人であるということを自覚した上で、あなただけが私のような罪人を憐れんで下さる神です。そして、あなただけが私のおぞましい、恐ろしい大きな罪を、唯一赦すことが出来、そして私を正しい者に変えて下さる力ある神です。そのような『神の力』と『神の愛』を素直に心に受け入れ、そして神を求めるということです。『救いを求める』ということ、これが私たちに必要なことです。勿論、具体的に悔い改めると

いうことは、自分の罪を神に言い表すということを含めています。これを『罪の告白』とも言います。

Iヨハネ 1:5~10 を、お読みしたいと思います。

5: 神は光であって、神のうちには暗いところが少しもない。これが、私たちがキリストから聞いて、あなたがたに伝える知らせです。

6: もし私たちが、神と交わりがあると言っているながら、しかもやみの中を歩んでいるなら、私たちは偽りを言っているのであって、真理を行ってはいません。

7: しかし、もし神が光の中におられるように、私たちが光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。

8: 罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにありません。

9: もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。

10: もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです。神のみことばは私たちのうちにありません。

ですから是非正直になって、「神の前にもう自分は裸同然である」ということを認めて、遠慮なく自分の罪を神に言い表して下さい。勿論、自分の罪を認めるというのは、簡単なことではありません。なぜなら、私たちにはプライドがあるからです。「私はそんなひどい人間ではない」と、思いたいわけです。でも聖書の罪のリストを見て下さい。肉の行ないのリストを見て下さい。神の10の言葉「十戒」を見て下さい。あなたは、そのスタンダード（基準）に見合っているでしょうか。そうでないなら、クリスチャンであろうとクリスチャンでなかりと、罪は罪でありますから、それを正直に神に告白して下さい。そして、これは勿論、具体的に言う必要があります。自分の罪を。聖書は具体的に罪のリストをアップしていますから、その罪と照らし合わせて、言い表すというのが、「その神の言われることに同意する」というのがその本来の意味でありますから、自分が罪と思っていないことも聖書が罪と言っているならば、神がそれを罪だと指摘しているならば、それを罪と認めなくてははいけないわけです。「別に法律に反したことはしていない」とあなたは、言い張るかもしれませんが、聖書で「それは罪だ」と言っているならば、それは立派な罪なんです。ですから、それを言い表す。神と同意して「聖書に書かれている通りの私は罪人であります。この罪を私は犯しました、あの罪を私は犯しました」、勿論意識してないで犯した罪もあるでしょうから、そうしたことも常日頃から言い表すことが出来るならば、あなたはいつでも神の赦しを受けることが出来ます。そして、安心して暮らすことが出来ます。そうでなければ、私たちはいつも不安です。本当に自分の罪は赦されているのだろうか、本当に私は神に受け入れてもらっているのだろうか、本当に私は神に愛されているのか、いつも確信が持てないわけです。でも罪を言い表すことによって、間違いなく私の罪はすべて、イエス・キリストのあの十字架の血潮によって、洗い清められた、ということを確認することが出来ます。それは、聖書において保障されていることです。

次に3番目のポイントとして、「キリストを救い主として認める」ということ。「キリストを救い主として認める」、何故イエス・キリスト私たちの、人類の救い主なのでしょう、それは、イエス・キリストがどのような働きをされたかを見れば、ハッキリと理解出来るところだと思います。イエス・キリストという存在を、一般的には4つの見方で見ると思います。1つは『道徳感化説』という見方。イエスは、道徳を教えられた道徳の教師である。もう一つの見方は、『殉教死説』。一殉教者として死なれたんだ、ソクラテスのように。3つ目は、またそれに類するものですが、イエスは、哲学者の一人、『哲学者説』。ソクラテス、孔子、ゴータマシッタラダという釈尊、そうした世界の3大聖人とか、哲学者の一人であると。4

つ目は、または、もう一つの説として『開祖説』・『教祖説』といってもいいと思います。イエスは、キリスト教の開祖である。『教祖』というよりも『開祖』と言った方が正しいですね。『開祖』というのは、その宗教を始めた人。例えばイスラム教の開祖とは、ムハンマド。仏教の開祖と言えば、お釈迦さん、釈尊と。ですから、イエスもキリスト教の開祖である。これは、一般的な見方だと言いました。それは聖書の見方とは全然違います。聖書においてイエス・キリストは、『道徳感化説』による道徳の教師だとか、または『殉教死説』によるただの1殉教者とか、または『哲学者説』によるただの1哲学者、聖人の一人、でもないし、また『開祖説』、キリスト教の開祖でもない。むしろ、イエス・キリストは、聖書において、神である。神と人との間に立たれる仲介者、救い主であると言われております。人となられた神、100%神であり、100%人間である。三位一体の第2位格、子なる神。それがイエス・キリストであります。ですから、ただの人間ではないのです。イエスは神の御子、子なる神、その方が今から2000年前に私たちと同じ人間の姿をとって、この世に来て下さった。それが、クリスマスであります。そして、何のためにイエスがわざわざ天から人間の姿をとってこの地上に、私たちの間に来られたのか。それは、先ほどから話している通り、私たち人間が罪人であって、罪人は救い主を必要としているからであります。人間の罪と死からの救いをもたらすために、神の御子イエスは、この世に来て下さったのであります。その究極が、十字架の贖いの働きであります。神は大いなる愛のゆえに、イエスは十字架にかかって、そして私たちの罪を代わりに負って、十字架の上で代わりに罰せられたのであります。そして、イエスは死んだだけではなくて、葬られて、三日目に甦られたと、聖書は記しております。死から甦ったことについて、それは死に打ち勝つ方であるということイエスは証明され、そのイエスが復活されたからこそ、そのイエスを信じる者もまた、罪から死から完全に解放され、罪の力と死の力からも、その支配からもイエスを信じる者は、解放されるのであります。なぜならば、そのイエスが罪に打ち勝ち、死にも打ち勝ち、甦られたからであります。

I コリント 15 : 1~4 をお読みしたいと思います。

- 1: 兄弟たち。私は今、あなたがたに福音を知らせましょう。これは、私あなたがたに宣べ伝えたもので、あなたがたが受け入れ、また、それによって立っている福音です。
- 2: また、もしあなたがたがよく考えもしないで信じたのでないなら、私の宣べ伝えたこの福音の**ことば**をしっかりと保っていれば、この福音によって救われるのです。
- 3: 私があなたがたに最もたいせつなこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書の示すとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、
- 4: また、葬られたこと、また、聖書の示すとおりに、三日目によみがえられたこと、

これが福音の説明であります。飛んで **I コリント 15 : 17** を見て頂くと

- 17: そして、もしキリストがよみがえらなかつたのなら、あなたがたの**信仰**はむなしく、あなたがたは今もなお、自分の罪の中にいるのです。

イエスが甦ったからこそ、私たちは罪の力からも解放されたわけです。もう罪の結果により死ぬことは、なくなったのです。イエス・キリストは言われました。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。」(ヨハネ 11 : 25) に書いてあります。イエスがよみがえりであり、イエスがいのちです。ですから、イエスを信じる者もよみがえる。イエスを信じる者は、死んでも無くならない永遠のいのちを持つのであります。そして、そのイエスは、甦って、天に上げられました。そ

れを『昇天』と言います。天に上げられたイエスは、もう一度地上に戻って来られる。そして、その時には、神の国をこの地上に完成されるということ。これは、勿論天国という意味ではなくて、もう一度「天地創造時に地球を回復する」ということをなさいます。罪が入る前、人類が墮落する前の、神がすべてのものを六日間で造って、すべてをご覧になって非常に良いとされた、その状態にイエスは戻すのです。私たち人間をそれぞれ元の状態、墮落する前のアダムとエバの状態に戻すだけでなく、その地球も宇宙も人間の罪によって全部汚染され、破壊されてしまったものをもイエスは回復される。そのことを私たちは聖書において知っているのです。これは希望です。これからずっと地球は、ただただ環境汚染が進むだけではなくて、人間の罪も増大して、いろいろな戦争も起こります。自然災害だけではなくて、人間同士も大きな戦争によって殺し合います。世界は、ますます悪くなる一方です。放っておいてもこのまま地球は、滅びてしまいます。そう思うだけで、私たちにはもう希望がありません。自分の子供の世代、孫の世代、その曾孫の世代、その先はどうなのか。果たして彼らがこの世に生きている意味があるのだろうか。彼らに未来はあるのだろうか。政治を変えたって、根本的な解決になりません。社会福祉をしようと、または平和主義に基づいて、環境問題に必死に取り組んだところで、誰にも止められないものです。でも、聖書によれば、この壊滅していきだけの地球を、イエス・キリストが再び戻って来られる時に、回復して下さると書いてあります。

次に4番目のポイントとして、「イエス・キリストを自分の救い主として信じる」ということ。3番目と似ていますが、3番目は、「キリストを救い主として認める」ということ。「認める」というだけでなく、4番目のポイントは「キリストを自分の救い主として信じる」ということ。ポイントは「自分の個人的な救い主として信じる」ということです。一般論としてではありません。常識としてではありません。神学上という話ではなくて、教理的ではなくて、自分の個人の救い主として信じるということ、これが4番目のポイントです。これがない限りは、人は救われません。クリスチャンには、なれないわけです。1～3番目までは、頭で信じる事が出来ます。その位は、皆さんも頭では信じていると。でも4番目は、どうでしょうか。これは、心で信じなければ出来ないことです。この救い主イエス・キリストを、自分の救い主として心を開いて受け入れることが、信じるということになります。「信じる」といった言葉を一つとただけでも、いろんな意味があると思いますし、信じることには、いろんな幅とか温度差があると思います。いろんな定義があると思います。でも、「信じる」ということは、人間が生活するうえでは、大切な要素であることは、誰もが認めているところだと思います。信じる事がなければ、人は生きていけないわけです。朝起きる時、もう既にあなたは信仰生活を始めているわけです。朝起きて、もし家が崩壊してしまうなんてことを思ったら、恐ろしくて家の中にいられないと思います。そして、皆さんは今ここに座っております。もし、今皆さんが座っている椅子が、自分の体重を支えることが出来ない、と思えば誰も座ることは出来ません。座ったとたんに、壊れて腰を打つなんてことが分かれば、誰も座ることが出来ないわけです。ですから必ず私たちは、信仰に基づいて生活しているのであります。それを普段は意識していないだけで、人間関係も勿論信仰なしでは。信仰という言葉は語弊があるかもしれませんが信頼という言葉に置き換えた方が良いでしょう。実に神を信仰することは、神を信頼することに他ならないのであります。その信頼があって、初めて私たちは、相手を知ることが出来ます。互いに愛し合うことが出来ます。信頼せずに疑ってばかりいては、いつまで経っても相手のことは分かりません。相手との関係もつかむことが出来ません。ですから、この「信じる」ということは、手段の一つです。知識の手段の一つです。人格的な関係を生み出す一つの手段であります。信じることなしに、知識には至らない。信じることなしに、人格的な関係、人を知るといっても含めて、体験することが出来ないわけです。そして、愛し愛されるためにも、この信頼すること、信じるということは欠かせません。このように神は、誰でも出来ること、信じるということ子供でも出来ます。赤ちゃんだって知っているわけです。親に抱かれるわけです。親

が落とすかもしれない、そんなこと思ったら、赤ちゃんはもうずっと泣きっぱなしです。お母さんのおっぱいには毒が入っているかもしれない、そう思ったら、当然乳房にも疑いをかけてしまって、そのまま衰弱死してしまうわけです。赤ちゃんでも信じている、生きています。信じなければ、人は生きていけないわけです。信じなければ、救われないのであります。誰でも出来る、この「信じる」という、非常にシンプルで単純な手段を通して、神はご自身の存在を私たちに教え、そしてご自身の愛を私たちに提供しようとしているのであります。「信じる」というこの日常の手段をもって、神を知って、キリストの救いを体験する、その道を神は備えて下さったのであります。他に必要ないのです。あれをしなければいけない、これをしなければいけない、修行を積む、苦行を積む、お布施をする、献金をする、体に傷をつけ、いろいろな修行をする必要はまったくありませんし、いろんな犠牲を払う必要もありません。ただ信じるだけでいいわけです。「信仰」という言葉は、「信じて仰ぐ」と書きます。「信仰」という言葉を頭の中に連想してみてください。それと共に同じ「信じる」という言葉でも「信心」という言葉があります。日本人は「信心」という言葉をよく使います。普段はあまり「信仰」という言葉は使わないかもしれませんが、「信心」という言葉の方が身近かもしれません。でもこの「信心」というのは曲者で、この「信心」の中には「思い込み」も含まれます。または、「盲信」、盲目の信仰、メクラの信仰も含まれます。「鯛（イワシ）の頭も信心から」といいます。「何でもかんでもただ信じればいいんだ」と。でもそのような思い込みだとか、盲信と「信仰」は、まったく違います。信仰というのは、あくまでも目の前にイエス・キリストという生きて人格的な存在があることを知って、認めて、そして信頼する、というものです。I ペテロ 1:8~9 にこう書いてあります。

8: あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、榮えに満ちた喜びにおどっています。

9: これは、信仰の結果である、たましいの救いを得ているからです。

信仰は、結果の前提です。「たましいの救い」というのは、神との人格的交わりの回復を指します。それがあって初めて、真実の喜びを体験して、真理を理解する、悟ることが出来るわけです。聖書をいくら読んで、いくら学んでも、説教をいくら聞いても、日本一長い説教をこの教会でいくら聞いたとしても、本当のたましいの知識を得ることは出来ないということです。イエスは、疑い深いトマスに言いました。「**見ずに信じる者は幸いです。**」ヨハネ 20:29 の言葉です。

そして、5番目のポイントは、「**信仰を告白する**」というものです。罪の告白ではなくて、今度は「信仰を告白する」、「信仰告白」です。具体的に信じる時は、どのようにしたらいいのかということです。その方法や仕方は、絶対的なルールとか定めはありませんが、ただ誤解のないようにして頂きたいのですが、「キリスト教に入信する」なんて言い方をよくします。それは、何かクラブにでも入会するようなサウンド、聞こえがしますけれども、勿論入会するためには、その場合資格が必要であったり、お金がかかったりするわけです。それと同じように、「キリスト教に入信する」時も、何かお金がかかるのではないか、何かそこに犠牲が、供え物だとかそうした物質的な、金銭的なものが必要とされるのではないかと勘違いする人もいますが、そうではありません。「信仰を告白する」ということは、お金がかからないことです。そして、これも誰にも出来ること、子供でも出来ること、お年寄りでも出来ることです。あなたが何者でも、健康だろうと、病気だろうと、身体に障害を抱えていようと、誰でも出来ることです。ただ、心でイエス・キリストを信じて、口で告白するだけです。ローマ 10:9~10 のところも、皆さんよく知っていると思います。クリスチャンになる時には、この聖句をきつと実行したと思います。

9:なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。

10:人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。

心の中で私は信じています。たまにそういう人がいます。「一度も口に告白しないで、でも心の中ではイエスを信じているんです。」とか、「これは誰にも言っていない。私は隠れクリシタンと言われるかもしれない。隠れクリスチャンと言われるかもしれないけど、私は心の中では信じているんです。でもこれは家族にも言っていないし、友達にも言っていないし、同僚にも言っていないし、誰も知らない。でも私は心で信じているんです。」それは実に怪しげな信仰です。なぜなら聖書では、心で信じるだけでなく、口で告白して救われるのです。「告白」という言葉は、だれかに伝えるということです。勿論神様に先ず第一に伝える必要がありますが、それだけではなくて人の前でも、よくこの教会で「イエスを信じたい」という人は、牧師の私の前でそのことを表明し、そして一緒にイエス・キリストを受け入れる罪人の祈りを奉げ、それを皆さんの前でも行う、公的にそれを表明する、人の前で信仰告白する、ということを行います。それは、別に大勢の前でしなければならないことではありません。一人や二人でもいいわけです。でも聖書では、二人、三人という証人が、その証言には必要だと言われています。二、三人の証言によって「その人の言うことが真実である」ということが証明されるということも聖書に書かれていますから、できたら少なくとも二、三人の前で告白出来たら一番というわけです。そのことによって、確かに自分も信仰告白したんだと、証人がちゃんと二人・三人いるんだと、いうところで、勿論その中にはイエス・キリストもおられるわけです。「ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。」と、イエスはおっしゃいました。イエスの前ですということ、イエスを知っている者たち、イエスの名によって集まっている者たちの中であって、彼らの前であって、告白するということが含まれていることを知って下さい。それをまだしたことがない人は、場合によっては、まだ本当に自分が救われているかどうか、自分が本当にクリスチャンかどうか、このままもし死んでしまったら天国に行けるかどうか、一抹の不安がありますというところから完全に解放されます。なぜならば、私は確かに証人たちの前で、教会の中で、イエスを信じるという信仰告白をしたからです。それがないと、時に自分の信仰を疑ったり、自分の救いを疑ってひょっとしたら私は天国へ行けないかもしれない、確信が持てないわけです。もし確信が欲しいなら、改めてローマ 10:9~10 を実行して下さい。もしかしたら、これが出来ていなかったの、口ばかりのクリスチャン、ただバプテスマを受けたけれどそれは水浴びでした、という人も出てくるかもしれません。ここで、皆さんに古代の民話を紹介したいと思います。この古代の民話というのは、悪魔の弟子たちとその師匠である悪魔との間に交わされたそのやりとり、これは勿論民話ですから聖書に書かれている話でもありませんし、ただひょっとしたらそういうことは、悪魔と悪霊の世界ではなされているのかもしれない、というものであります。それを紹介しますので、聞いて下さい。

悪魔の子分たちがいよいよ修行の期間を終え、いよいよ地上に派遣されることとなった。そこで悪魔は弟子たちに（勿論悪霊ということですが）、彼らがしようとしている誘惑の計略の数々を述べさせた。第1の弟子の計略、「私は人間に神などいないと教えこみます。」すると悪魔の批評はこうでした。「そんなことではわずかな人間しかごまかせない。彼らのほとんどは神がいることを知っているのだ。」（その通りです。）第2の弟子の計略、「私は地獄などないと教えこみます。」悪魔の批評「それは何の効果もない。それは罪だらけの人間共は、誰に教えられなくても罪の結果は地獄だと知っているのだ。」そして、第3の弟子の計略はこうでした。「私はイエスを信じるのは結構なことだ。だが急ぐ必要はないと教えこみます。」悪魔はこれを聞いて大いに満足した。「直ちにこの計略を実行せよ。おまえはきっと多くの人間どもを滅亡させる

ことができるだろう。」

悪魔の計略は、まさにこの第3番目のものだと思えます。「神などいない。」無神論者はそう言いますが、でも無神論者も実際のところは、心の奥底では神の絶対的な存在を否定出来ないでいます。もし、神の絶対的存在を無神論者が否定してしまうならば、彼らは生きていけないからです。意味がない生き方を誰も出来ないわけです。何をしても意味がない。「神がない」ということは、何の目的も無いわけです。息をするのも、食べることも、勉強することも、仕事することも、何もかも意味がない。そんなことではとても生きていけないわけです。「何か目的があるはずだ。」神を認めないと、私たちは虚しいものでありますから、その虚しさの中ではとても生きていけないわけです。偶然に自分が生じた存在にすぎない。アメーバのようなものからただ進化して今になったんだと。「神はいない、創造者なんかいない」とそのように言い切っている人もありますけれど、そう言いながらも「自分には目的がある」と思っているわけです。一日無目的で生きることは、誰にも出来ないわけです。ですから、そんなことは、いくら悪魔が宣言したところで、宣教したところで、何の効果もないということです。勿論第2の計略も「地獄はないと教えこむ」と言っても人は皆罪悪感を持っています。誰もが後ろめたさを持っています。死を怖いと思います。何故、死が怖いのでしょうか。みんな生まれれば、必ず死ぬのに。誰もが死ぬのに。死なない人なんて一人もいないのに。であるならば、「赤信号みんなで渡れば怖くない」ということで、「死」だって怖くないはずだと。でも人間は漠然と「死が怖い」と思っているわけです。みんな死ぬことならば、怖がる必要はないはずですが。なのに怖いというのは、その死後の世界が、恐ろしいからです。そこには、「地獄」という言葉は使わないかもしれませんが、「何か恐ろしいものがその先にある、自分を裁くものがその先にある」という、その潜在的な恐怖心というのがあるわけですから、「地獄はない」などと言ったって、人間にはそのような潜在的な恐怖心があるわけです。だから一番いいのは、「イエスを信じるのは結構なことだ。でも、まだ、今は時ではない。いつか信じます。いつか考えます。」これこそが悪魔の最大の計略であります。今が恵みの時です。今日が救いの日です。かたくなになっではいけない。今日私たちはイエス・キリストを信じなければ、明日はないかもしれない。

6番目のポイントは、これはやはり一般的に誤解されることですが、マインドコントロールとの違いです。さっき「信仰」と「信心」の違いを少し言いましたが、「イエス・キリストを信じる」、「キリスト教徒になる」ということは、マインドコントロールされることではないですか。思い込みの中に「マインドコントロール」も含まれるわけです。信心、思い込み、マインドコントロールもそこに属するものです。カルトにおいては、このマインドコントロールの手法が使われます。「教祖の教えを信じる」というよりも、「マインドコントロール」されて、それが正しいと信じ込んでしまう。「信心」というものを持ってしまうわけです。これに対して「キリスト教信仰、クリスチャン信仰」とは、目の前の事実、つまりキリストの存在、十字架という事実の上に成り立っております。聖書に書かれているイエス・キリスト、これは歴史的にも証明されています。イエス・キリストの十字架の死と復活。これは、いまだかつて科学的に否定されたことは一度もありません。「鰯の頭も信心から」という信仰をクリスチャンは持っているわけではないのです。列記とした事実を信じているのです。歴史的な事実、史実に基づいた信仰を私たちは持っています。これは「盲信」でもなければ、「マインドコントロール」でもありません。逆に、他の宗教を考えて見て下さい。他のカルト団体のことを考えて見て下さい。彼らは、そのような誰もが否定出来ない歴史的な事実に基づいた信仰を持っているのでしょうか。神道ひとつ取って見て下さい。仏教ひとつ取って見て下さい。イスラム教もひとつ取って見て下さい。ほとんどが作り話です。ほとんどが想像の産物です。架空の物語です。一方で聖書は、神の現実というものを歴史を通じて証明し、そしてそれは数千年間書きかえられたことのないものです。ですから聖書は、世界中に受け入れられている「世界のベストセラー」

となっているのであります。その聖書に基づいた信仰を持つことは、決して思い込みでもない、ただの信心でもない、マインドコントロールでもありません。ウィルフレッド・グレーテルという人がこういうことを言っています。

「キリストが今日この現実の世界に生きておられることは、私が生きている以上に確かなことである。」

これは凄い言葉です。自分の存在よりもイエスの存在の方が、リアルだと言っている。私たちは自分の存在証明をしようとしませんが、でもイエスの存在証明の方がもっとたやすいということです。これは少し皆さんには、分からないと思うかもしれませんが、イエス・キリストが現実におられるということ、あなたがこの現実にいるということ、そのことも時々考えて見て下さい。あなたの存在よりもイエスの存在の方がはるかに決定的に確かだということがきっと分かると思います。

そして、もう一つマインドコントロールで特徴的なのが、「思い込み」だけでなく、「恐怖心を植え付ける」というものです。相手に恐怖感を抱かせることによって、集団の中に引き込むわけです。感情に訴えて「もう世界は滅びるんだ。世は終わりだ。地獄が待っている。私たちの団体に属さなければ、教祖様を信じなければ、滅びるだけ。」そして、「いろんな災いがある。ばちが当たる。災害はその印である。」と。そのような終末の危機意識を持たせたり、「組織に属さなければ、いろんな害が及ぶ」とか、そういう脅しをかけるわけです。

でも聖書にはイエス・キリストの宣教の第一声、これは**マタイ 3:2** にあります。

「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」

一方でマインドコントロールを使うカルトの手法は、「悔い改めなさい。地獄が近づいたから。」これは、全然違います。イエス・キリストの宣教の第一声は、天国の知らせが第一だったわけです。しかも、「悔い改めたら、天国が近づく」ではないのです。「天国が近づいたから、悔い改めなさい。」と言っているわけです。希望があるから、信じなさいと、言っているわけです。勿論聖書は、神の裁きについても語っています。実際のところ聖書は、イエス・キリストもそうですが、天国のことよりも地獄のことの方をより多く語っています。聖書には、天国の言及よりも地獄の言及の方が多いのであります。それは勿論、愛をもって私たちに警告を与えているということです。でも第一声は、「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」脅しをかけているのではありません。恐怖心を煽って、信心とか、思い込みとか、マインドコントロールを施そうとしているのではありません。カルトは先ず脅してくるのです。先ず恐怖心を植え付けます。ここの違いを知って頂きたいと思います。

次にカルトの特徴として「人格の破壊」であります。マインドコントロールは最後には人間の心の破壊、「人格の破壊」をもたらします。自分の自由意志で物事を決定出来ないようにしてしまうわけです。自分で考えられない、自分で決められない状態にするわけです。それを促すために、同じ呪文を、祈禱文のようなものを、何度も何度もマントラを唱えるようなことをするわけです。短い同じような言葉を何度も繰り返し、脳に刷り込むわけです。体もそれに伴って奇異な行動をするようになるわけです。でも、本物の信仰、聖書的な信仰は、神との人格的な交わりを回復することであり、英語で神を信じるということは”believe in God” この in がつくことによって人格と人格が結びつく、信頼関係を持つということを表現しています。ただ、神の存在を漠然として信じている、街頭でインタビューすれば大半の人が「神を信じていますか」と聞けば「信じている」と言うと思います。ただし、その神がどんな神かも知らず、その神とは勿論人格的な信頼関係に基づく交わりを持っているわけではないけれども、何となく信じている。

「目に見えない存在は、きっとあるだろう。超自然的な存在はきっとあるに違いない。」その程度の信仰、それを信心というわけですが、でも聖書の信仰というのは、この神と人格的な交わりを持つわけです。それによって得られる第一の恵み、それはイエスが言われている

そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。(ヨハネ 8 : 32)

マインドコントロールは人を縛って、人を不自由にさせるわけです。自分で物事も考えられない、自分で物事を判断出来ない、縛りを与えます。その組織に属していなければ、その教祖にいつも付き従っていなければ、生きていけない。そういう、言わば依存をもたらすわけです。でも、イエスは**ヨハネ 8 : 32** のように言われました。この言葉は日本の国会図書館にもこの言葉は揚げられています。その生涯で 100 万人以上の人たちをイエス・キリストの救いに導いた世界的なアメリカの伝道者 **D・L・ムーディー** が、18 歳の時に彼は信仰を持ったわけですが、その時に彼はこういう信仰体験をしたと、綴っています。

「私が回心を経験した日の朝、戸外に出て行った時、すべてのものが愛に輝いているかのように感じました。太陽の光、小鳥たちの美しいさえずり。その時ほどこれらに共鳴を感じたことはありませんでした。そのように回心の朝は、私にとって万物が一変して見えたのです。」(D・L・ムーディー)

このように本当に救われるということ、本当の回心とは、明るい外の世界に開かれるものであって、真の自由を得るものであって、新しい人間性に生きるものであって、カルトのマインドコントロールのように小さな建物の中に押し込められたり、閉じ込められたり、監禁されたり、そのカルト団体にいつも縛られているような、いつも暗いじめじめしたような恐怖心を煽られながらいるような、そんな不自由なものとは全く正反対のものだということが、分かると思います。

もう一つ、マインドコントロールの特徴として、「集団への献身を要求する」というものです。「身も心も、あなたの財産も、銀行口座も、お金がなければ消費者金融で借りて来い。」と言い、「それをすべて組織に、または教祖に奉げなさい」と。「そうすることで幸福が得られる、そうすることで病気の癒しが得られる、そうすることで商売が繁盛する、子宝に恵まれる」とか。そういうことを説得するのであります。その集団は、世から隔離された苦行の場と化していくのであります。「献身」と言う言葉は、勿論キリスト教でも使うのですが、それは「人」に対してではなく「神」に対する献身であります。現実からの逃避としての献身ではなくて、むしろ現実の世界に出て行くための献身であります。ですから教会は、人を縛り付けるところではありません。むしろ「出て行きなさい。全世界に出て行って福音を宣べ伝えなさい。」決して自己を目的化した集団ではありません。自分たちの幸福ばかり、ご利益ばかり、組織を拡大することばかり、自己目的化した集団ではないです。現実の世界の中で一人一人が確かな人生を送ることを、勧めるものであります。信仰というのは、そのような確かな判断力、良いことをする善行に対する強い意志、的確な選択と決断力をもたらすもの、それが信仰であります。今導かれた場で、責任をもって生きていくというもの、その目的はただ神に栄光が帰せられることを、目的とする、それが信仰であります。神の国が私たちの為に用意されているのですが、それまでの間、私たちはこの地上において、完成を目指して、今は発展途上にあるもの。ですから、クリスチャンと言えども、信仰を持っているとは言えども、完全ではないわけです。パーフェクトではないわけです。まだ私たちは途上にあるもの、完成を目指している、いわば未熟者であります。でも、その未熟者の弱い私たちを通して、完全な神が、救い主が働いて下さいます。逆に、自分が弱くないと思っている人たち、強いと思っている人たち、出来ると思っている人たち、そういった人たちを、神は打ち砕き、へりくだらせませす。あなたは自分の力では、結局は何も出来ない。

自分の力を頼りにしていれば、必ず自分自身に失望する。自暴自棄になる。自己憐憫になる。そして、自滅するだけだ。だから、神は弱い者を通して働かれますが、強い者、自分が強いと勝手に思い込んでいる者には、謙遜を求められます。神を信じる事が出来るように、砕かれるように。そういう体験も与えるわけでありませぬ。それは、神の知恵というものです。そのような神の取り扱いを受けて、私たちはこの現実社会にあっても、もう何も恐れることなく、堂々と胸を張って生きていくことが出来ます。絶対に信頼出来る存在が傍らかたわにいて下さるからです。神を信じるとはそういうことです。何も恐れなくていい、現実がどんなに厳しかろうと、先が見えなかりょうと。「これから老後はどうなるだろうか、これからこの国はどうなってしまうのだろうか、経済はどうなるだろうか、何をしても虚しい、本当に希望はあるのだろうか」そういう現実の社会の中、世界の中にあつて、神が私たちを一步一步その知恵に基づいて、導いて下さるのであります。それを信じて歩むこと、それがクリスチャンライフというものです。ですから、今どういう状況にありょうと、それは、すべて神様はご存じで、すべて神様がお許しになっていることです。

「何故ですか。何故こんなことが。理解出来ませぬ。意味が分かりませぬ。目的が分かりませぬ。」そういう人々に対して、信仰は確固たる目的を与えてくれます、確固たる理由を与えてくれます。このためにあなたはここにいるんだ、このためにあなたはこのことを経験しているんだ。このために、この将来のために、あなたがイエス・キリストの似姿に変えられるために、神に栄光が帰せられるために、イエスの名前があがめられるために、一人でも多くの方が永遠の滅びから救われるために、このために、あのために。必ず信仰者はそのような確固たるものを、神との関係の中で持つことが出来ます。信仰を通してそれを得ることが出来ます。

7番目のポイント、最後になります。「**信仰の結果**」というものです。イエス・キリストを救い主として信じる信仰告白をもってクリスチャン生活はスタートしますが、その信仰告白に対して、神は特別な恵みを与えてくれます。もし、この恵みがなければクリスチャン生活は根本的には成り立たないと思つて下さい。それを簡単に5つに要約します。

一つは、「**新生**」。新しく生まれる、新生です。「新生」とはイエスを信じることによって人間の内側に神からの永遠のいのちが与えられて、新しく生まれ変わるといふものです。これは、イエスがニコデモに対して言われた言葉を思い出して下さい。ヨハネ 3 : 3 に

イエスは答えて言われた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」

新しく生まれる、「新生」です。また、こうも言われています。これはヨハネ 5 : 24 の言葉

まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。

このようにイエス・キリストを信じる者には、新しく生まれ変わるといふ新生体験がもたらされます。つまりクリスチャンには2回の誕生日が与えられるといふことです。1回目の誕生日は、勿論肉の誕生日、自分のお母さんのお腹から出てきたその誕生日です。もう一つの誕生日は、これは霊的誕生日です。つまり新生の日といふことです。イエスを信じて新しく生まれ変わった日、クリスチャンになったその日を、第2の誕生日と言つて良いと思つます。でも、新しく生まれ変わったことのない、2回誕生日を迎えたことのない人は、必ず2回死にます。「肉体の死」として「永遠の死、霊的な死」であります。でも2回誕生日を迎えた人は、1回の死で済みます。それは「肉体の死」のみです。

イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。(ヨハネ 11 : 25)

イエスを信じない者は、死んでもまた死ぬ、永遠に死に続ける、永遠に地獄の責め苦に遭う、永遠に焼かれる、永遠に真っ暗闇、永遠に後悔、永遠に泣いて歯ぎしりする、それが第2の死です。

でも2回生まれた者は、「肉体の死」だけでいいのです。でも、それは本当に解放であります。「肉体の死」をもってもう2度と死ぬことのない「新しい体」を頂けるわけです。

話を戻していきたいと思います。信仰によって人間は永遠の世界、神の国に生きるいのちを頂けるわけです。天国には、肉のいのちでは入れません。肉のいのちは滅びるからです。天国は永遠の世界ですから、永遠のいのちが必要なわけです。これをイエス・キリストを信じる信仰によって、得られる。それが新しく生まれる、新しいいのちを頂くということです。ですからこれは単なる「人間革命」ではなくて、行き先が変わることです。所属する世界が変わるということです。国籍は日本ではなくて、韓国ではなくて、アメリカではなくて、国籍は天にあるということです。

2番目の要約とは、「**義認**」です。「義と認める」、英語では”justification” 「義認」とは罪人が神の前に無罪とされて「義人」と認められるということです。ローマ 3 : 23~25 にこう書かれています。

23 : すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、

24 : ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。

25 : 神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現すためです。というのは、今までに犯されて来た罪を神の忍耐をもって見のがして来られたからです。

イエス・キリストは、私たち罪人の身代わりとなって十字架に死に、そして罪人の私たちが受けるべき「死」という刑罰を代わりに受けて下さいました。神が要求する律法のスタンダード、それが「神の義」というものです。これをイエス・キリストが罪人に代わって全うして下さいましたのです。そのために信じる者は、神の前に無罪とされる。そして義と認められる。それが「義認」ということです。一つの例を挙げますと、裁判官が罪として罰金刑を宣告しながらも、後に自分がその被告人に代わってその罰金を払ってあげて、その被告人が無罪放免となる。これはちょっと、完全にイエス・キリストの救いを言い表すものではないかもしれませんが、確かにアメリカであった実話です。その裁判官がお父さんで被告人は息子だったので。息子は、罰金刑が払えません。ですから刑を言い渡した後、裁判官は自分の裁判官の服を脱いで、そして息子のところに駆け寄って、父親として代わりに罰金刑を払って釈放するというのをしました。罪は罪と。ただその罪は、私たちには負いきれないのです。罪の罰金は払いきれないわけです。それを神が自ら独り子イエス・キリストを遣わして、その独り子が代わりにその罰金を、ご自分の命の代価をもって払って下さった。それが、十字架の贖いの死というものです。神が、神の御子を遣わして罰する。前代未聞の話です。究極のウルトラCです。そんなことをして私たち罪人は、自分では自分を救えなかったわけですが、神が驚くべき救いの方法をもって、私たちを救って下さったのであります。結果、私たちは義と認められたわけです。

ここで「新生」という言葉と「義認」という言葉、似た言葉ですが、その関係を考えて頂きたいと思いますが、人間の持っている「原罪」に対してこの「新生」と「義認」がどのように働くのか、考えて見て下さい。その「原罪」には罪の性質”sinful nature”というものと、また神の裁きを受けなくてははいけないというとがめ意識、「とがめられるのではないか、罰せられるのではないか」という罪意識。罪の性質と罪意識の二つが要素として原罪に含まれています。その二つの要素の前者のもの「罪の性質」は、「新生」に

よって解消されます。新しく生まれ変わることによって、この「罪の性質」からも私たちは解放されます。永遠の命が与えられることによって、罪の性質が作り変えられて、全く別のものにきよめられるわけです。

一方後者の「罪意識」（とがめられる、裁きを受けなければいけないという意識）は、「義認」によって解決されます。人間は神の裁きを受けるべき立場にありながらも、イエス・キリストのなされたことを信じることによって、無罪とされる、義と認められるからであります。救いというものは、神の律法を守り行おう、守ろうとする行ないや道徳、倫理、ありとあらゆる自己犠牲の伴う修行・苦行、そういったものではとても得られないものであります。あくまで信仰によってのみ、義と認められるということです。それを「信仰義認」と言います。自分の行ないによって自分を義と認められようとするのを「行為義認」と言います。別の言い方では、「律法主義」と言います。頑張って、犠牲を払って、自分を救う。「お百度参りすれば」とか、「たくさんお布施すれば」とか、「戒名のお金を積みめば」とか、いろいろなことを人間は思いつくのですが、そんなことでは、とてもではありませんが、神の前には義と認められないということです。

3番目の要約として、信仰の結果、私たちは「神の子」となります。ヨハネ 1:12 にこう書いてあります。

しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。(ヨハネ 1:12)

イエスを信じることによって、誰でも「神の子ども」とされ、神を「わが父」と呼ぶことが出来るようになります。神の子どもとされる特権とは、「神の子どもとしての資格」ということです。神の子として生きる新しい力と立場。神の家族の一員に加えられるということ。そして、神の国を相続するものになる、ということ。素晴らしい特権であります。金田福一という牧師が、『神様の身内』というタイトルで、このようなコラムを書いておられます。非常におもしろいので、紹介させていただきます。

「イエス様に救われた人は、イエス様の身内にされてしまったのです。それから後の彼は、人生の一切の出来事をイエス様と一緒にやっています。救われるまでの彼は、自分に都合の悪いことや不幸なことが起こると、神様がわからないとか言っていました。それは、結局神様の身内でなかったからです。利害関係でもって神様と相対し、取引をしていたのです。しかし、今はイエス様に連れられて、神様の身内にされ、見方になってしまいました。ですから自分の苦しみでさえも、他人事のようにになってしまうのです。」

よく表現しています。神様の身内になるとは、こういうことだと。

4番目、「神との平和」。これが信仰の結果、もたらされます。ローマ 5:1 にこう書いてあります。

ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。(ローマ 5:1)

神との平和。かつて私たちは、罪あるものとして神と敵対していたわけです。敵対関係にあったら、穏やかにはられません。常に脅威を感じているはずですが、でも、その神との平和が、イエス・キリストを信じる信仰によってもたらされて、私たちはこれからは安心して生きていけるわけです。もう不安は払拭されました。何も心配しなくていいんです。恐れる必要がありません。「罰せられるのでないか。死んだらど

うしよう。生活に困った。困窮した。これではもう飢え死にしてしまう。家族は路頭に迷ってしまう。」とか、これまでは、いろんな不安や恐れ、または罪意識から来る罪悪感、罪責感。そういったものに私たちは振り回され、縛られ、苦しめられてきたと思います。でも神との平和を持つことによって、それらはすべて払拭され、解消されます。今までは、そうしたものにもしかしたら心も蝕^{むしば}まれて鬱病になってしまったりとか、精神に異常をきたしてしまったりとか。でもそういった人たちでも、薬だとか医者に頼らなくても、イエス・キリストを信じる信仰によって、その心の中にある漠然とした不安や恐れ、虚しさ、そういったものから解放されることによって、もう薬に頼らなくてもいい、もうカウンセラーや精神科に通わなくてもいい。神との平和を頂いたことで、心が安心、心が満たされて、そしていつでも頼れる方がいる、アポイントをとらなくてもいい、お金を出さなくてもいい。すべての処方箋は神の言葉に記されています。神は、いつでもどこにでもいて下さるわけです。いつでも相談出来ます。いつでも助けになってくれます。いつでも救いをもたらして下さいます。そのような神との平和が、私たちにも与えられています。

5番目、最後ですが、「救いの確信」もこの信仰の結果、もたらされます。Ⅱテモテ 1 : 12

私は、自分の信じて来た方をよく知っており、また、その方は私のお任せしたものを、かの日のために守ってくださることができると確信しているからです。(Ⅱテモテ 1 : 12)

この「救いの確信」というものは、「信仰によって与えられた祝福が、決して変わることがないし、決して失われることがない」ということを信じることです。これを人間の知性、感情、意思のすべて、人格的な機能をもつすべてをもって確認するということです。イエス・キリストの福音は、その伝える手段・方法は違えど、福音そのものは、その本質は、変わることはありません。古今東西、2000年前から全然変わってないわけです。どの国にも、どの民族にも、どの世代にも、どの時代にも通用するもの、普遍的なものです。方法は、いろいろあります。現代では、インターネットを通じてとか、いろんな媒体がありますけれども、でも内容、その本質は、同じです。何故同じかというと、神様が同じ方だから。イエス・キリストは昨日も今日もいつまでも同じ方。神の言葉は、たとえ天地が滅びうせても変わることがない、失われることがないものです。神は真実であり、神は変わらない愛をもって私たちを愛して下さいます。永遠の神は、永遠の愛をもって、神の子どもたちを愛して下さいます。ですから、その愛の神様の言葉、聖書は神から私たちに宛てられた「ラブレター」というのです。この「ラブレター」の中にある約束も当然変わらない、失われることがないものです。色あせることもありません。「ラブソング」は、時代時代、流行によって忘れ去られてしまう、変わってしまうものですが、この「ラブレター」そしてこの「賛美」というラブソングは変わらないわけです。

最後に、ローマ 8 : 35~39 を皆さんと一緒に読んで、この時間を閉じたいと思います。私はここを読むだけで目頭が熱くなります。感動しないでいられません。もし、あなたが神の愛を疑うようなことがあった時、必ずこのローマ 8 : 35~39 を開いて下さい。繰り返し、繰り返し、声に出して読み上げて下さい。それだけで、あなたは確信出来ます。神はこの私をも愛して下さい、聖書にそう書いてあります。“Jesus loves me this I know for the bible tells me so.” (イエスが私を愛していることは、聖書に確かに書いてある) 日本で最初に歌われた讃美歌も、この“Jesus loves me”ですね。聖書に書いてあるんです。最後にそこを読んで終わりたいと思います。

35 : 私たちをキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。

36 : 「あなたのために、私たちは一日中、死に定められている。私たちは、ほふられる羊とみなされた。」

と書いてあるとおりです。

(世にあっては患難があります。イエスがそう言われました。キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者は皆、迫害を受けますと、パウロは言いました。)

37: しかし、私たちは、私たちが愛して下さった方によって、これらすべてのことの中にあっても、**圧倒的な勝利者となるのです。**

(あなたは、もう敗北者ではありません。単なる勝利者でもありません。ぎりぎり何とか勝ったのではなくて、圧倒的な勝利者です。)

38: 私はこう確信しています。(クリスチャンならば、これを確信出来ます。) **死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、**

39: **高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も(どんな造られたものでも、勿論サタンでも、人間でも)、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。**

これをあなたも確信しているでしょうか。もし、確信出来ていなかったならば、今日の7つのポイントをおさらいしてみてください。第1ポイントから第7ポイントまで。最後の第7ポイントに来たら、信仰の結果をあなたは得るはずです。その中でも「救いの確信」。最後に取り上げたものは、あなたのものになっているはずであります。もし、これを今あなたが持っていないならば、クリスチャンを自称しているけれども、水のバプテスマは受けたけれども、信仰告白はして教会員になってはいるけれども、でもこの最後の救いの確信を自分のものとしていないならば、もう一度、今日のポイントを反すうしながら、実行してみてください。救われて下さい。本当の意味で、クリスチャンになって下さい。キリストの弟子となって下さい。神の子どもとなって下さい。愛される者になって下さい。そして、ここに書かれていることを経験して頂きたいと思います。既に経験している者は、もう自分の心の中は、喜びでいっぱい、感謝でいっぱいだと思います。黙ってはいられないと思っています。こんな良い知らせ、自分の中だけで、自己満足では押さえきれない、とどめられない。たこ焼きを焼きながら、お客さんに伝えずにいられない。彼らは、イエスを知らなければ、このままでは天国に行けないのです。あなたの愛する家族も、良い人でも、「よほどこの人の方がクリスチャンばいし、そのへんのクリスチャンよりもよっぽど良い人、立派な人」とあなたは思うかもしれませんが、でも聖書によれば「イエス・キリストを信じる者」だけが救われるのです。神の子どもとされるのです。天国へ行けるのは、イエスを信じる信仰のみです。他の方法はないということです。このことも是非、頭では分かっているとは思いますが、もう一度意識して頂いて、もう一度呼び覚まして頂いて、はっきりとこの良い知らせを一人でも多くの人たちに伝えて頂きたいと思います。彼らが救われることは、自分のことのように喜べるはずです。「最近クリスチャンとして喜びがどうも欠けているようだ。喜びがどうも何か薄れているようだ。湧き上がるような爆発的な喜びが自分の中からはどうも欠けているようだし、消え失せているようだ。」と思っている人が、この中にあれば、是非福音を、喜びの良い知らせを伝えて下さい。そして、彼らがイエス・キリストを信じたその現場に、その誕生の現場に居合わせて下さい。自分の赤ちゃんが生まれた時を思い出して下さい。どんなに嬉しかったか。あの人にも知らせよう。無事に生まれました、元気な男の子です。可愛い女の子です。自分の子供ならば、世界で一番愛せる子供です。そのような神の子どもが生まれる瞬間に立ち会えること、これ以上の喜びは他にありません。クリスチャンとして、この喜びを是非持って頂きたい、取り戻して頂きたいと思います。では、今日はこれで終わりたいと思います。